※日本年金機構作成のものから抜粋して掲載しております。
掲載については、年金事務所に確認済みです。

厚生労働大臣賞

岐阜県　平澤　芽依様　（高校生　女性）

平成２５年８月、父が亡くなって一ヶ月程経ったこの時期から、私は年金を受給しています。「遺族厚生年金」です。私が学校で年金のお話をきいてきた日の祖父との会話の中で知った事実でした。

小学四年生の夏休み、海水浴をしている最中、父は事故で亡くなりました。父の稼ぎと祖父の貯金とで新しい家を建て、あと半年で兄も小学校卒業、という矢先の事故でした。その出来事によって、一日にして弱冠十一歳の私は年金受給者となったのです。

家族の大黒柱が突然いなくなり、収入は激減、今まで以上の節約を強いられるかもしれないということは、幼かった私でも容易に想像できました。しかし母は、家計が苦しいことなど、一切私たちには話さなかったのです。父親がいないということで私たちに気をつかわせたくなかったのでしょう。表では気丈に振る舞っていても、パート勤務で年収280万円ほどの母にとって、私たち子ども2人と祖父母を養わないといけないということでどれほどの心労があったのか…。高校生になった今の私でも分かりかねるほどです。

中学2年生になったある日、大学進学をしたいと言った私のために、塾に通わせてもらいました。当然、その道に進むということはお金がかかることだと分かっていました。だから、この夢を諦めて就職した方が家計のためになるのではないかとか、自分がこんなこと言いだしたら迷惑じゃないかとか、たくさんの葛藤がありました。私たちをこんなにも助けてくれる遺族厚生年金がもしもらえなかったら？私は夢を追うことはできるのか？考える程に、決して怠ることなく保険料を納め続けていてくれた父への感謝の気持ちがあふれてくるのです。それと同時に、ノートがあり、ペンがあり、教科書がある環境下で勉強ができることが、「当たり前」ではないと、身の引き締まる思いです。

父が亡くなってから丸6年が経とうとしている令和元年の春、私は県内の私立高校に入学しました。学費のことを心配している私に対し、母が
「あんたの将来への投資だと思ってるから。芽依が頑張るなら応援するよ。」
そう言葉をかけてくれたのを今でも覚えています。これも、遺族年金によって少しうまれた心の余裕と、常に私たちの意志を尊重してくれる母だからうまれた言葉だと思いました。こんな背景があるから、いろいろな人の思いを背負っているから、私は国公立大学合格という目標を掲げ、夢を追えているのだと実感しています。私の夢への挑戦を支えてくれている遺族年金の支給も、成人までだと知りました。いつまでも「助けてもらう側」ではいられません。

今まで以上に努力し、社会の一員として貢献し、自立することが、一番の恩返しになるのではないだろうか。私はそう考えています。年金は老若男女問わずお互い様だと言い合える助け合いの制度だからです。そして私の母のように、いつかできる家族を守れる大人になりたいです。6年以上、人よりも早く年金に助けてもらっている私はなおさらだと思います。成人しておらず、まだ保険料を納付できない私ですが、その年齢に達した時、私と同じような境遇になってしまい、折角もった夢を手放そうとしている子どもたちを支える準備をしている、そんな意識に変わりました。

私のように不幸にあった子どもでも、他の子と同じように夢を追っていいんだよ、そんな風に背中を押してくれる、そして家族に心の余裕を与えてくれる、それが遺族年金だと思っています。少子高齢化が進む中での若者たちの負担は重くなるばかりです。しかし、自分たちが生まれた国を、日本という国にいる以上、平等に課せられる義務を果たしてこそ、一人の大人としての自立になると思います。今これを読んでいるあなたにも、いつ何がおこるかわかりません。まずは「知る」ことからはじめてみませんか。自分自身と、大切な人の笑顔をまもるために。

日本年金機構理事長賞

福島県　大戸　和子　様　（50代　女性）

「お父さんありがとう」、今心からそう思って言えます。

私が、20歳の誕生日になった時、忘れもしない雪の降る寒い日でした。

父は、材木の仕事をしており冷えた体で帰ってくるなり、「年金に入ったからな」と私に嬉しそうに、にこにこしながら年金手帳を渡してくれました。その時、私は何のことだかわからず、とりあえず「ありがとう」と父に言ったことを覚えています。当時、我が家は妹と二人姉妹で二人とも夢を持っており、夢実現のため大学に通っていました。二人分の大学の学費を出すのは大変な状況だったと思います。それに大学は、自宅から遠く、アパート住まいでアパート代と食費代も二人分となると、かなり大変だったと思います。そんな中でまだ義務化されない時代に父は年金の必要性を考え、20歳になり私たちを国民年金に加入させてくれました。

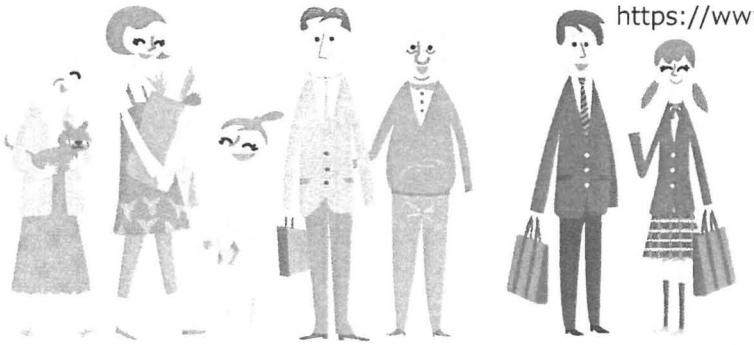
後で、叔母から聞いたことに自分たちの生活費を削っても、私と妹に仕送りをして夢実現に向けて支援してくれていたとのことでした。かなり厳しい生活の中でも、父は何時も年金を納めるお金を忘れることなく、生活費とは別に毎月送ってくれました。私は、そのお金と振込用紙をもって役場の年金課に毎月お金を納めに行ったのを覚えています。時には、行くことに面倒くさいなと思うこともありました。大学の同期生に聞いても「何のこと」と言われ、知っている人はいなかったのではないかと思います。そんな中、役場にお金を払い込みに行くたびに、年金係の方が「あなたのお父さんとお母さんは素晴らしいね」と言ってくれたのを覚えています。父は、何時も先を見据えて行動する人でした。「将来自分の生活のためにも、そしてみんなのためにも大事になる」とよく言っていました。あの時代、まだ20歳で年金に入ることを義務化されていないときに、父は先を読んでいたのだと、今になって思えば素晴らしいと思うと同時に感謝しております。

私の年金のお知らせ通知にも、20歳から働くまでの間、国民年金に加入しており、その払い込み年数が書いてあります。見るたびに、いつもありがたく思っております。

その父も今は、病気で施設での生活を余儀なくされております。そんな父を支えてくれているのは、家族であり、そして年金の支援のおかげです。

少子高齢化時代、みんなで支えあう日本の年金システムを、私たち一人ひとりが自覚して暮らしを支えていけたらよいなと考えております。65歳にならなくても私の知人は、病気のため障害年金をいただいており、一人暮らしでも生活をつなぐため支えてもらっています。誰のためでもない、一番は自分のため、そしてその自分が生活する地域の人々の生活を支えるため、生活と生活をつなぐため、年金は私たちにとって支えあう重要なシステムです。退職も近くなり、年金を支払う側から年金をいただく側にあと何年かで変わります。年金と自分を、考えることが多くなりました。老いることは不安もありますが、人が人を支えることは素晴らしいこと。「感謝の気持ち」を忘れることなく、年金をいただきながら幸せに生きていきたいと考えております。「ありがとうお父さん」

他の入賞作品は、日本年金機構ホームページでご覧いただけます。

わたしと年金エッセイ　検索

日本年金機構ホームページ
https://www.nenkin.go.jp/